大正元年十月一日第三種郵便物認可
(毎月一回一日發行)
大正二年十二月一日發行・第二卷第三號
(大正二年十一月三十日印刷納本)

近代思想

十二月號

■必然から自由へ(評論)……榮(一)
■波濤の歌(散文詩)……荒畑寒村(二)
■生存と誤譯(評論)……安成貞雄(五)
■貧乏生活(短歌)……安成二郎(九)
■冬の夜の村(長詩)……土岐哀果(一〇)
■胡麻鹽頭(雜錄)……貝塚澁六(一三)
■山本飼山の死(感想)……彥、時雄(一四)
■洪水のやうに(長詩)……德永保之助(一六)
■地獄のドン・ジュアン(脚本)……堺利彥(一九)
■新刊(批評)……記者(二五)
■罷業の宣言(小說)……荒畑寒村(二六)
■大久保より(雜錄)……寒(三一)

近代思想社
東京府下大久保百人町三五一

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP 95 J2 K47 no.1

ニッケル喇叭付
大改良蓄音器

都下幾十の新聞紙は筆を揃へて弊社工塲の整頓完備せるを稱揚せり、其域に到達せる弊社は今や製産費の低減により破格の廉價を以て左の新蓄音器を賣出せり。其品質音聲は遙かに他を凌駕し江湖諸賢が家庭唯一の友たるべきを信ず

廿二號 廿二圓也　十七號 十七圓也

新音譜大賣出し

十一月賣出しの新音譜は〆治、奈良丸、旭猨、春子太夫、梅坊主、戸山學校軍樂隊、平野源三郎の追分節澤田、横山、遠藤三氏の調和樂等何れ劣らぬ斯界の名士、聽く者をして昔日の苦を忘れしむ

赤紙兩面 金二圓也
黑紙兩面 金一圓五十錢也

神奈川縣川崎町
日本蓄音器商會
電話川崎四九番
全國到る所に支店出張所あり

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

213-442254

第二巻　第三號

必然から自由へ

一切の生產方法を社會の所有に歸せしむると共に、商品の生產は排除せられ、それと共に又、生產者に對する生產物の支配が排除せられる。社會生產を支配する混亂に繼いで自覺的組織が起る、個人的生產競爭が止む。斯くして始めて人は、確實なる意味に於て、全く動物界を離れ、動物的存在の狀態から人間的存在の狀態に移る。從來人間を支配してゐた生の條件の總体が、人間自身の指揮と討究との下に移り、始めて人間は自己の團体生活の主人となり、自然の眞實なる主人となる。

從來は人間の外に在つて外的法則として彼等を支配してゐた、人間自身の社會的活動の法則が、人間自身によつて原因の十分なる智識に於て、適用せられ又統御せられる。從來は自然により或は歷史によつて人間に課せられてゐた團體生活其物も、人間自身の自由なる製作となる。從來人間を支配してゐた外的の客觀的の諸勢力が人間の監督の下に移る。此時以來始めて人間は、十分なる自覺を以て自己の歷史を作る。此時以來始めて、人間の企圖する社會的諸原因が其の大部分に於て、しかも益々增加する比例を以て求められたる結果に到達する。

是れ必然世界より自由の世界への人類の飛躍である。世界の此の解放的活動を成就する、是れ近世平民階級の歷史的任務である。

―（フエルヂナンド・エンゲルス）―

大杉榮譯

波濤の歌

GERSHUNI

露國革命運動の勇士、グレゴリイ・ゲルシュニ逝いて既に五年。吾等が横濱阜頭に、西比利亞を脱獄して更に米國に往かんとする彼を送つてから、もう七年余りになる。いま、彼が散文詩『波濤の歌』一篇を譯するに當り、劍と筆とをとつて戰つた火の如き靈魂を偲ぶこと、更に切なるものがある。

曾て荒涼陰欝な北方、寒風がその氷のやうな吹息で、凡ての生物の存在を脅かす處、羊歯と松とが冬の衣に包まれて、只だ稀れに春潮の微笑と抱擁とに慰さめらるゝ處に、人間の作つた花崗岩の防波堤が、遙か無極の海に延びて居た。

巨大なる黑き壁は、海面高く誇り顏に立つて、猛烈な波濤の襲撃を笑つた。幾世紀、波濤はその石の敵に殺倒した。げに永く、また頑ななりし彼等の闘よ!。遂に强大なる堤防の、不屈なる元素によつて亡ぼさるゝに至れるまで。見よ、五月の春の日に、日光が海洋の面を照すと共に、輝やける碧玉の如き波濤は、踴り、戲れ、そして花崗岩の敵に對する勝利の歌を歌ふを!。

波濤は天の鳥の如く、幸福で自由であつた。暴風は奇しき子守歌で彼等を抱愛し、樂し氣にまた氣輕に、彼等は靄深き遠方に轉び去つた。されど賤しく邪惡なる暴君たる人間は、波濤が樂しき運命を嫉んで、その光榮ある進みを止めんと決した。最早や彼等を深海の上に踴り且つ遊ばしめず、また碧色なる天をして、微笑みて挨拶せしめざらんとした。

人間はその屈從せる奴隷を集めて送り、大地の胸より大石を掘り出し、海洋の深みへ投げ入れた。波濤は驚き見守りつゝ、親しき挨拶をもつて新來者を迎へた。石は益々多く深みに落ち、その列は更に高く且つ厚く、海面に進んで往つた。進みを阻められた波濤は、昏亂して廻りつ飛びつした。ひそやかに、彼等は石壁の上に動いたが、忽ち胸を破られて、呻き苦しんで跳び戻つた。

壁は冷たく、打ち克ち難い。海洋は絶望して戰慄した。

『裏切!裏切!、吾々は友として彼等を迎へたの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に、彼等は却つて吾々の自由を奪つた！』怒れる波濤は絶叫した。

嵐は狂亂し、そして泣く。暴風雨は咆哮して防波堤に訴へる。

『オ丶、大なる建物の首石よ！。君等もまた、曾ては獨立を誇つて居たのに、何故いま、他の自由を奪つたのか。』

『如何も止むを得ない。吾々の聲は何事も構ひ付けないのだ。』岩はこう云つて答へる。

嵐も底意地惡き咆哮を受けて過ぎ、寄せては返す波濤は常にこのニュースを齎らす。

『吾々は敗北した。吾々の自由は去つた。そして奴隷こそは、今の吾等が運命である！』

いま海洋は、靜肅にも平和にも見える。老いたる強き波濤は、嵐の手も聲も達せざる深みに沈み、只だ若き波濤の、笑ひもせず、光榮ある自由を歌ひもせず、樂しみも無く寄せ返すのみ。太陽の光り陰慘として、憂鬱なる雲は、天地を鈍く灰色に見せて居る。只だ時として、若き波濤の力を併せては、再び防波堤に突撃を試むるが、然し追ひ返され、敗壞せられ、そして失望せしめらる丶、許りである。

海洋は悲嘆し、哀泣した。數年は空しく過ぎて、更に多くの勇敢なる波濤は、或は追ひ散らされ、或は亡び失せた。

今や彼等は壓伏されて居る。然し、新しき波濤は來つて云つた。

『吾々は再び力を集めて、忍耐して待たねばならぬ。』

また數年は過ぎた。新しき波濤は一層强力となり、睡れる同志を呼び醒して、岩に對する新しき戰ひに、凡ての波濤を呼び集むる爲め、全方面に使者を送つた。老いたる波濤は答へて云ふ。

『吾々はもう、吾々の昔の仇敵に對して、戰ひを挑む勇氣も熱情も欠いて居る。』

波濤の使者は、次にその援助を乞はんが爲め、嵐と暴風雨の許に往つた。若き使者の語を聞ける時、老いたる戰士の心情は再び熱し、彼等の血は火を點ぜる如く燃え立ち、そして過ぎける日の光榮を想ひ出した。

睡れる者を呼び醒す雷霆の如く、今や鬨の聲は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

各方面に轟いて、老いたる者を若返らせ、勇氣と敢爲とに凡ての者を燃え立たせた。

波濤は起つた。東から、西から、北から、南から、彼等はうねりを打つて集まつた。暴風雨は狂亂し、怒號し、大渡津海は煮え返つた。一波進みて萬波從ふ。その如何に恐ろしく、如何にその猛烈なるよ！。唸りつ、喚きつ、泡立ちつゝ壁を擊ち、退いてまた、敵の面上に突進する。常に增し往く勢力を、その背後に從へながら！。

いま、海洋は一瞬間引き退いた。凡ての波濤は結合せる一擊をもつて、その最後の攻擊たらしめんが爲めに寄り集つた。防波堤を作れる暴君は、今やその最後の近づけるを見、恐怖の余り數個の岩石を除いて、波濤の進みに些しく自由を與へんと欲した。されど暴君！、そは汝に向つて既に余りに遲し！。

海洋は最早や泣かず、また哀願せず。余りに多くは亡びた、死せる者にとつては、如何なる復讐も未だ甘しと云ふべからず。和解は不可能である今や老いたるものも若き波濤に加はり、獅子の鬣の如く、その白髮をそよがせた。大地は慄ひおのゝき、天なる太陽は光りも暗からんとする。嵐はその激怒を增し、萬有は昏迷と狂亂とに陷つた。而して見よ、壁は搖らめいて、曾て多くの波濤が倒れた海底に沒落するを！。

『此處より去れ！、汝腐れたる骸よ！。是は自由に對する高貴なる戰士の墳墓である。若く勇敢なりし波濤の眠れる處である！。』海洋は崩れ落つる岩石に命じた。そして深淵はその巨口を開いて、巨大な建物の首石を呑込んだ。

海洋は今や、歡び勝ち誇り、敵に對する勝利を祝して居る。

樂しく自由に、波濤は再び寄せ返す。鬪ひに倒れたる若き波濤を讃へながら！。

殉難者に榮光あれ！生ける者に自由あれ！。

荒畑寒村譯

■近代思想第一卷合本■

■前號に豫告して置いた合本が、愈々出來上りました、

■定價一部金一圓、郵稅は當方で負擔します。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

生存と誤譯

安成貞雄

一

最近に於ける翻譯物の全盛的刊行と、是れに伴ふ誤譯の指摘とは、新たなる翻譯論と誤譯指摘可否論とを生んだ。

片上伸氏は、誤譯指摘の可なるを認めながら、極めて不徹底の理由を以つて、是れを公開せずに、私信の形を以つてするを可とすと唱へた。わが生方敏郎氏は、翻譯家は文壇の貴族で、誤譯指摘家は、賤民(?)だといふ意味のことを云った。小宮豊隆氏は、文章世界の翻譯論中に、誤譯の種類を列擧して、指摘をヂャスチファイしたと云ふことであるが、是れは終に讀まなかつた、併し新世紀十月號の『罪と罰』の誤譯指摘を讀めば、略其論旨のあることを知るに難くない。

前三氏の外、長谷川天溪、森田草平其他の諸氏も、翻譯、誤譯に關する意見を公にしたが、たゞ一人の生方氏を除けば、餘は皆な、誤譯の已むべからざるを認めながら、其の指摘も亦已むべからざることを認めて居る。

併しながら、指摘を正當視した諸氏も、其態度が消極的であつて概して誤譯指摘と生活とを結び付けて、それが當然の權利であることを主張しては居ない。積極的なる小宮氏も、其所までは論じつめて居ない様である。

今、茲に、私は、全く別様の見地から、誤譯指摘の正當なることを主張する。

二

作者から云へば、自己を通じて人間を見ると、讀者から云へば他人を通じて自己を見ることが、近代文學に於いて特にエンファサイズされた點である。

日本に於いては、作者が先づ、佛露の作家を通じて人間を見た、そして、所謂小説家としてゞはない、一個の人間となつて、自己の生活を描いた。大多數の讀者は、其作物によつて、初めて眞の人間が動いて居る文學を得た。そして、其中に、自己を見た。是れが、日本に於ける自然主義發生の説明の一形式である。

三

自然主義文學の中に自己を見た讀者は、更に、深く、廣く、詳しくそれを見んとした。併し、讀者と作者との間には、勞力に非常の差がある。作者は、自己の思想の培養と、創作との勞苦を甞めなければならぬ。そして、其勞苦に比して極めて僅少なる報酬を以て生きて行かなければならぬ。それに反して讀者は、極めて僅少の努力を以つて、作物を味讀し得る。

今日の如く、作者と讀者とが同一の教育程度にある時代にあつては、此の勞力の差が、讀者をして、作者よりも早く進ましめる。先きに讀者を啓發した作者が、讀者に、時代遲れとして、舊いものとして捨てられるのは、此の關係に基く。新進作家の全盛期の短いのも、また新進作家の名をなし易いのも、此の關係に基く。

此の關係によりて進歩した讀者は、深く、廣く、詳しく自己を見んとするに方つて、日本の作家が、其要求に應じ切れないのを見た。日本の作者の作物が歐洲大陸の作物に淵源して居るとを知

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つて居る讀者は、日本の作者の媒介によらずに、直接に其等に就いて自己の姿を見んとした。

歐洲大陸の近代文學の寶庫にはいつた讀者は、あとから〳〵と其寶物を見んことを需めた。

此の需要に應じて、翻譯の全盛期が來た。自然主義の勃興は、進歩した作家の運動によつた。翻譯の全盛は、進歩した讀者の需要に基いた。

四

此の原因の相違は、延いて創作と翻譯との動機にも及んだ。創作には内發的の、已み難き藝術的衝動が主として働いたが、翻譯には、需要に應ずべき打算的な動機が主として働いた。言ふ迄もなく、是れは、今日の創作、翻譯について眞であるばかりでないまた言ふ迄もなく、今日の創作にも、主として打算的な動機によつて成つたものがある如く、翻譯にも、内發的な、藝術的衝動によつて出來たものがあるが、大體に於いて翻譯が、主として打算的動機から成つたものであるとは、疑ひを容れざる事實である。本間久雄氏が、ワイルドの『ドリアングレー』の翻譯『遊蕩兒』の誤譯を辯解して、生活の必要上急を要したからだと云つたと傳へられる。噂の眞僞は暫く措き、本間久雄氏の翻譯の動機は、主としてそれになつたとは確かであらう。

岩野泡鳴氏に至つては、其の誤譯に滿ちた『象徴主義運動』の翻譯に於いて、明らかに、生活の爲めに翻譯したと斷つて居る。此の場合に於いては、はじめから、原稿料、即ち其の譯文の市價が問題となつて居つたのである。一個の商品として取扱はれたのである。

是れは、譯者自身が公言した場合であるが、他の翻譯に於いても、其原稿料が第一の問題となつて居ることは疑ひもない事實である。即ち、翻譯者は、一の職工として、其翻譯を仕上げたのである。

五

職工が、其賣品を造る場合に、何を造り、何程に賣らうと、それは當人の勝手である。問題は、それが、他の同業者に或る利益を與へ、或は不利益を與へることによつて生じて來る。

翻譯者が、翻譯を賣る場合に於いても同樣である。

總ての翻譯者は、其の生存の必要上、其力の及ぶ限りの物を賣るのは、當然の事である。十の力を有するものは、十の價のあるものを作つて賣るがいゝ。五の力を有するものは、五の價のあるものを賣るがいゝ。五の翻譯力と、十の賣捌の驅引法を有するもの、十の翻譯力と五の驅引法を有するものは、各々其力に從つて其製作品を賣るがいゝ。今日の如く、著述家組合がなく、問屋がない場合に製作品を賣らうとするには、是れ以外に方法がない。自由競爭を認むる人には、是れが最上の方法でなければならぬ。

而して、翻譯者は、此の方法を認むると共に、必然に、他の同業者の競爭をも認めなければならぬ。

自分が五の價値のものを出した時、他の同業者が六の價値あるものを出せば、自分のものは賣れなくなることを知らなければならぬ。自分の品物が粗惡であれば、他の同業者にも迷惑を及ぼすことを知らなければならぬ。迷惑を蒙つた同業者は、其損失を防ぐの自由を有して居ることを忘れてはならぬ。

『ならぬ』と云ふことはない。知らなくても、忘れても構はない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

併し、知らざると忘るゝとに係らず、他の同業者も亦、自己の生存の必要上、其爲すべき事をなす。

誤譯指摘は、生存の必要上此の爲すべき事を爲すことである。今日、他の點に於いて、自由競爭を是認し、贊成する多くの文學者が、特に翻譯の場合に於いてのみ、是れを否認し、排斥する理由はない筈である。否、筈の有無は問題でない。他人の誤譯によつて、自己の生存が危くされる虞れがある時、默つて居るのは、自殺と同然である。

六

一の翻譯の誤譯が、他の同業者に及ぼす迷惑、損失はさまざまである。

今日の如く、文壇に於いて、評論家、小説家として、相當の地位を有し、名聲を有して居る人々が、續々として誤譯に滿ちた飜譯を公にすることによつて、飜譯家は、全体として、信用を失はなければならぬ。

讀者は大づかみに物を見る。此頃の飜譯は皆な誤譯だらけだ」と斷じて了ふ。讀者は一々原書と比べて見ない。若干の、誤譯なき翻譯が出ても、誤譯がありはしないかと危ぶむ。從つて、賣れ足がおそくなる。出版業者も、翻譯を、信用し難い商品、危險なる商品として見る。其結果は、需要の減少、價格の低落となる。是れは、誤譯を指摘せられた譯者の實情、誤譯集を出版した書肆の實情に徴して、既定の事實であつて、他の翻譯者に及ぼした影響も、明に指點することが出來る。

斯る場合に、他の翻譯者は如何にすべきか。誤譯指摘より他に仕方がない。

當人は誤譯がないと云つても、出版者が誤譯がないと云つても、それは、今日の廣告の時代に於いては、讀者の信用を繼ぐには不足である。飜譯の大家の保證はどうであるか。翻譯の大家と目された人々が、案外外國語を讀めないことが明になつた今日、これだけでは不足である。結果、翻譯者それ自身が、其の實力を示すより他に途がない。即ち他の誤譯指摘が是れである。

今日、他の商品の場合にあつては、同業組合があつて、其商品の良否を定め、不良品の製出者に對する制裁法が存して居る。此の組織のない文壇にあつては、不良品を指摘して、自分の製品の良好なることを示すに、個人的な方法を擇ばなければならぬ。

七

輸出羽二重の品質が非難を受けた場合に、越中の羽二重業者が、惡いのは加賀物である。越中の羽二重は良好であると云ひ得る如く、翻譯全体が不評を蒙つた場合に、帝大出身者が、誤譯するのは早稻田の出身者である。帝大出身者は誤譯しないと云ひ得る。斯る場合に於いては、帝大出身者が、一團となつて、早大出身者の誤譯を指摘することがあつたとしても、これは商業の通則であつて、少しも不思議はない。英國の商人が、一團となつて、獨逸の商人と競爭するのと、何の選ぶ所もない。

而して、此の團體的競爭の結果、誤譯を多數に指摘された團體中に、他のメンバーに比して、誤譯すること少なきにかゝはらずたゞ、或る團體に屬したが爲めに、誤譯者と見做さるゝ虞れあるものが、他の者は誤譯するが、自分だけは誤譯しないと云ふことを明かにし、其生存を確保することも、少しも不思議ではない。之れと反對に、誤譯指摘を少なく受けた團體の者が、自分は誤譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しない團體の一員であると云ふことを公表するのも亦、少しも不思議でない。

誤譯者の爲めに、他の翻譯者が迷惑を蒙る時、最も甚だしい損失を受けるものは、誤譯者と同じ團体に屬する場合である。

早稻田出身だと云ふことが、確なる翻譯者と云ふ事と異語同義である場合には、精確なる翻譯を出した先驅者は、同業者から感謝を要求し得る。併しながら、早稻田出身と云ふことが、誤譯者と云ふ事と異語同義となる場合には、誤譯の俑を作つたものが、他の同業者から排斥され、恨まれるを如何とも仕難い。關係が密接である程、利害も亦密接であるからである。

八

誤譯を指摘された場合に、誤譯でないと信ずる點について、十分に爭ふのは、商人としての本分である。默して、誤譯指摘家の言ひ分を通すのは、自分の商品の瑕疵を認容するものである。若し、指摘家の言ひ分が當つて居るならば、商人が爲す如く、其商品たる翻譯を改頁するに如くはない。

併し、斯る態度を採るよりも、指摘家を中傷し、惡口し、如何なる誤譯者も、誤譯指摘者　比すれば、貴族と賤民との差があると云ふ事を主張するのが利益であるならば、その態度を採るのも惡くはない。斯る場合に於いては、問題は、其人の賢明であるか否かと云ふことになるだけである。

世に單なる誤譯指摘者と云ふものがない。誤譯指摘は、指摘者が自分の實力を示し、商品としてゝ翻譯を高價に賣らんとする結果である。併しながら、純然たる誤譯指摘も、今日の如き翻譯界の現狀にあつては、立派な職業として存在し得る。

輸出品としての生糸製茶を檢査する爲めに、生糸檢査所があり製茶檢査所があるが如く、商品としての翻譯を檢査するものがあつても不思議はない。而して、生糸、製茶の海外に於ける評判が檢査所によつて保たるゝ如く、翻譯の讀者界に於ける評判は、指摘者の手によつて保たれなければならぬ。

自分が誤譯をしながら、指摘者を罵るのは、自分が詐欺を働きながら、刑事を罵るのと同じである。

九

翻譯及び誤譯に對する曖昧の態度は一に、翻譯を以つて商品と見做さない點から來る。商品と見做さないのは、自己の生存を維持する業務を卑しとする舊思想から來る。空漠な議論を以つて、實生活よりも貴しとする陋習から來る。自分のする仕事が、需要供給の關係によりて支配されると云ふ明白な事實を認める事を欲しないか、若しくは認め得ないか、どつちからか來る。生きる事を卑しとする思想から來る。

■和氣の翻譯（オスカア・ワイルド）

和氣が現代文藝叢書第卅一篇として、アンドレ・ジイド著『オスカア・ワイルド』の翻譯を出した。

先づ馬場孤蝶氏はワイルドに就て曰く、『吾々の嬉しく思ふ所は、彼は藝術家としても、個人主義の十分に行はれ得べき社會制度の必要なる事を論じて居る事だ。』云々。更に戸川秋骨氏は和氣に就て曰く、『和氣君の語學の力、その翻譯の才は、世間では何とも言はぬやうだが、私は竊かに畏服して居る。――云ふ迄も無く、其出來榮は立派なものである。』云々。その中の寓話で、曾て本誌に掲げたものも尠くない。

『メレディスの葬儀』、『メレディスと其時代』、及びベアリング作『青い道化』『女占方』等を附錄とする。皆皮肉で氣の利いた物だ。（寒）（金二十五錢日本橋春陽堂）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

貧乏生活

安成二郎

『貧乏な家から、
　エライ者が出る』
それを樂しみに、
　子供をこさへる。

×

父も寒し、
母も寒し、
子は暖かに、
　女の腹の中に眠るらん、
親不孝の胎兒よ。

×

泥棒と結婚と流行る
　十二月、
われは彼等の幸福を祈らん。

×

『子どもが二人になつては、
君も大變だねエ、
まアワイフが働ける身になつたら、
女中を止して、小さな家に入つて、
君が子どもの守をしながら稼ぐンだね、
さうして僕の貸した金を返して吳れ給へ』

×

太陽の、腹立たしさよ――
　金持を
貧乏人と同じく照らし。

×

又しても、
貧の盗みといふ言葉が、
　思ひ出される年の暮かな。

×

『貧故に』
　それで一切の、
罪惡が解決される月は來にけり。

×

金持の日向ぼつこり、
　彼等を貧民扱ひする、
太陽の皮肉さよ

×

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

冬の夜の村

NIKITIN

會堂のやねの上
もくねんとして、しづかに、月はさまよふ、
しみじみと閃き落つる
雪のうへに青じろく。

夢みるごとき小さき池のほとりに
きらめきて會堂は立てるなり——
その黄金の十字架はちらちらと
蠟燭のひかりのごとく。

村のうちはひつそりとして
くらがりとねむりの境、
小舍はみなふかく窓をとざして立てり、
ふりつもる雪の中に。

しんしんとして目にいるものもなき
大道に、つと
今、ほえて番犬の
それも、はた、ひつそりとして。

かれらが一日の勞働ののち、
わかき、老いたる、
へとへとに疲れて、そのかたき
せまき寢ごこにぞ抱きあへれ。

たゞとある一つの小舍のうち
ランプの光かゞやきて、
そこには病める白かみの
たましひの望みもたえて呻くなる。

死は近づけり、—かくてこの
をうなは孫のうへを思ふ、
いたましきみなし兒よ
とりいれの時は來るとも。

あはれ憐れなるをさなきものよ—、
今、かくもいとけなくして、鬪ひにいでんとす、
何の經驗もなく、たすけもなく、

この人生の悲しみの中に――、
見もしらぬ人のあひだに
だん／＼と、をとなになるらむ――
惡人はかれらを
よからぬ路にそゝのかし導くならむ。

面目なくも、あまり早くも
かれらは證書をつくるならむ、
愧かしくも神にも捨てられて
この地べたに陷るならむ。

神よ、かれらを許したまへ、
なんぢの賴りなき憐れなるものを――
杖とひかりと、かれらにあれ、
とこしへに神よ――、

燈明は
しづかにひつそりと動くなり、
聖書のうへに
ちら／＼と影をぞおとす、

老いたる顔のうへに、
いまはの姿のうへに、
二人の小さなる子どものうへに、
ぽつかりとあたゝかき煖爐の腰かけのうへに。

つと、この靜けさのなかに、
たのしげなる叫びぞひゞく――
饗宴の人のトロイカ
しやん／＼と驅けてゆくなり――、

消えぬ、遠きにひつそりと
橇の鈴のたからかに鏘たる音、
はた、心なくもたのしげなる
かのかなしみをかきみだす唄。

土岐哀果譯

Nikitin は一千八百二十四年南方露西亞に生れ、六十一年に死んだ。家は貧乏な大工。薄命の中に若くして死んだのであるが、その詩は眞純素朴、傑れた作も尠くない。そして、それは悉く皆、おのれの不幸な一生の悲しみのために、哀音を帶びてゐるといふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

胡麻鹽頭

澁六

■人の本を讀んで見て、どうも自分に分りかれる所がある。丸で分らないものもあれば、半分ぐらゐ分るものもある。よほど善く分つたと思ふものでも、矢張り二分や三分は分らない所がある。

■是は自分の理解力の不足から來る事もある。其の證據には、一度讀んで分らなかつたものが、再讀三讀して分る事がある。然し幾ら豫備の知識はあつても、書いた人と讀む人との氣質性情が異なる場合には、矢張どうしても分らない事がある。

■それから今一つは、本人が分らないで書いた事は讀む人にも分らない筈である。然し僕等の考では分らない事は書けない筈であるが、それを分らないまゝに書く人があるのだから、それを讀む人の方でも、分らないまゝに分つたような氣で居る人のあるのも不思議はない。

■僕は一体、分る事が好である。分らせる事が好である。好といふだけではない、それでなくては滿足が出來ないのである。僕の頭はそんな風に出來て居るのである。それで僕は人の文を讀んで、兎かく分らぬ分らぬといふ。すると人がよくそれを笑ふ。其の笑ふのは、僕の智識の不足を笑ひ、僕の氣質性情の淺薄を笑ふのであらう。それは僕も承認する。然し其外に今一つ、本人が分らないで書いたから、讀む僕にも分らないといふ理由があると思ふ。そして其の場合が隨分多いように僕は思ふ。

■前に云ふ通り、僕の考では、分らない事は書けない筈である。然しそれを書く人がある所を見ると、矢張り書けるものと見える。それの書ける人がエラクて、それの書けぬ僕がバカであるか否かは、まだ問題として殘して置きたい。

■尤も、人智はまだ限られて居る。從つて世事人事は分らない事だらけである。そして其の分らない事を分らせようとするのが人の努力である。そこで其の結果が、ハツキリ分つた事となつて現はるゝのもあれば半分りの儘で現はれるのもある。その邊の消息は萬ざら僕にも呑込めないではない。

■既にハツキリと分つた（或は分つたと思ふ）事だけで、一切の世事人事を殘りなく解釋し盡せるものと思ふのは、勿論間違である。そう思ふ人は即ち謂はゆる思想の固定した人で、換言すれば保守黨である。然し人間が考へさへすれば、何でも悉く必ず分るものと思ふのは、やらうとさへすれば何でも悉く必ず出來ると謂ふのと同じく、無理である。

■例へば、時間空間が人間の思想の範疇であると極めて置いて、而も猶時空以外の本体界を冥想して見るが如きは、全然無理な話である。出來ないと極めておいて、それをやらうとするのは無理である。そんな努力の結果になつた本は、讀む人に分らない筈である。

■人がよくこんな事をいふ、人間の智力は部分的のものである。智力の上に立つた科學などはさして大切がるには及ばぬ。人間には全心的の直覺がある。直覺に依つて本能的に言動するのが一番正しい事である。智識は到底、直覺直觀の前に平伏すべきものである。

■然し人の心が分つ可らざるものであるならば、純粹に智力だけの働きは無い筈である。又直覺が全心的であるならば、其中に智力の働きも含まれて居る筈である。よし智力を主として働いても、矢張それが全心的の働きで無ければならぬ。智力を直覺から分離させて、直覺の前に平伏させること

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が出來ぬ筈である。

■人が又よくこんな事をいふ。幽玄崇高な思想は理智を絶して居る。區々たる學問智識の能く及ぶ所でない。第一、言語文學は非常に不完全なものである。其の不完全な言語文學を以てして、幽玄崇高な思想を十分に發表する事は出來ぬ筈である。故に其樣な思想を發表した文章は、到底凡俗の眼に理解されぬ。これらの文字は只宜しく心會默契すべきである。

■如何にも、今日の言語文學は非常に不完全であらう。然し其の言語文字は誰が如何にして作つたのであるか。人間が自己の思想の發達に從つて自然に作り出だしたのではないか。然らば言語文字の不完全は即はち思想の不完全を意味するではないか。思想が完全になれば、それを發表する言語文字も從つて完全になる筈である。思想は完全だが、文字が不完全で困るといふのはおかしい。僕等の考では、思想がまだ不完全だから、從つて言語文字もまだ不完全なのだと思つて居る。

■勿論、思想感情は下等動物或は小兒にも存して居るが、言語文字は或る年齡以上の人間にのみ存して居る。故に思想感情が在つて、それに應ずる言語文字の無い場合が澤山ある。現に我々にも、言語文字に現はし得ざる思想感情が存して居る。然しそんな思想感情が、必ず高尚な者であるとは限らない。

■尤も、そんな思想の中に、將來の大思想たるべき者の萠芽が含まれて居る事も、僕は認める。然し幾ら大思想の萠芽でも、それがまだ不明瞭な者である事だけは確かである。そこで其の不明瞭な思想を、不明ながらでも發表して見たいといふのは人の自然の情で、それが又、其の思想を漸々明瞭にする道である。

■それで僕と雖も、不明瞭な思想を發表してはならぬといふのではない。全然分らない事は書けぬ筈であるけれども、半分りの事を半分りのまゝで書けぬ筈もない。只半分りを半分りとせず、一廉全分りの氣になつて、己には是でチヤンと分つて居るけれど、お前達では分らないのだ、と云ふような顔をする人のあるのは、僕等から見ると甚だ以て片腹痛い。

■今の大家先生の哲學論や文藝論には、右の半分り乃至三分の一分りを、全分り氣取でやつて居るのが、隨分多いように僕には見える。所が、それを讀む人達の中に、それを分らないと云つては無學淺薄の嘲を受けると思つて、强いて分つたような顔をする人もある。又丁度自分も半分りを全分り氣取にしたい性情の人であるならば、そこに一種の共鳴を感じて非常にそれを有がたがる。

■然るに、僕としては、その種の文章に接する時には、先づどうも分らないといふ不快な感じが起る。自分の智識が不足で分らないのは致方もない。又氣質性情の差異からして分らないのも是亦何とも致方がない只著者が半分りの所を全分り氣取になつたが爲に、それで僕に分らないといふ結果を生じた場合は、實に以て迷惑閉口致す次第である。

■それで僕の望む所は、何事にあれ、分らない事は分らない、半分りの事は半分り、三分の一分りの事は三分の一分りとして、在の儘に書いて貰ひたいのである。

■然しそんな事の出來る人と、全分り氣取になられば居られぬ人と、是亦氣質性情の差から生ずる區別であるとすれば、結局、何とも致方のない事かも知れぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

山本飼山の死

■ 堺利彦

■山本一藏君の自殺は大分世の注意を引いたらしい。僕もそれについて色々云ひたい事はあるが、こゝには只抽象的の理屈を少し云つておく。

■凡そ人のアキラメ方に二通りある。一つは一切の事實を在の儘に見て、正面からそれにブツつかつて、そこに安心するのである。今一つは、冷酷な事實の上に、暖かい美しい理想のメンを被せて、それに對して滿足を感ずるのである。

■此の二種の考の差は、個人の氣質と周圍の事情とに依つて生ずるものである。

■人に死といふ事がある。そして誰しも死にたくはない。そこで出來るだけ養生をして、出來るだけ氣の濟む樣な働きをしてモウ其上は仕方がない、死ぬれば心身空に歸する、跡は燒いて粉にして吹飛して呉れといふ樣な、至極サッパリしたアキラメ方をする人もある。又幾ら永生をして見ても(況んや若死をする樣では)、此まゝ此心身が空になると云ふ事が、どうしても堪へられぬ心地がするので、そこで靈魂の不滅とか、死後の生命とか云ふ事を考へて、此体だけは死んでも此心だけは永久に死なぬと思ひこんで、それで初めて安心する人もある。肉と靈とを分ち、此世の外に彼世を作りだしたのは、斯ういふ心の働きからである。

■又、人智の發達した時代、及び改革の希望のある時代に於いては、多數の人が此世に於いて肉の滿足を得ようと思ひ立つ。然し迚も自然力や社會的權力に抵抗する事が出來ぬと思はれる時代には、多數の人が此世と此体とを厭離して、彼世に於ける靈の生活を憧憬する事になる。

■厭世思想とか、アキラメ教とかゞ世に流行するのは、主としてそんな時代の事である。山本一藏君が自殺するに至つたのは、右の二つの原因がカラみあつた結果であると思ふ。

■希望のある時には、改革者を以て自ら任じ、熱心にその爲に働いて、十分の心の滿足も得て居たが、一たび周圍の壓迫に遭うて、それが出來ぬ樣になつて見ると、其の冷酷な事實(即ち我が心身が他の力に屈伏せざるを得ざるに至れる此の哀れな事實)を在の儘に見るに堪へず、それに理想のメンを被せて精神主義の信者となり、他の力に屈伏させられるのではない、我自ら此道を擇ぶのである、此道こそ眞に高尚なる人間の踏むべき道であると思うたのである。改革の業を抛つて昨非を悟り、新に精神主義者となり、或は元の靈的生活主義に立戻つた人々の心理は、大抵これで說明が出來ると思ふ。

■然るに此の人々の中に又三種の別が生じて來る。第一は其の新なる靈的生活に依つて衣食の道も開け、可なりの安心滿足を得る者である。第二は、其の新生活でも成功せず、其中世間の形勢も少し變じて來るとそろ〳〵又元の物質的改革主義に立戻る者である。然るに第三に至つては、靈的生活にも成功せぬが、さりとて跡戻りするには餘りに正直で、結局其一本道を眞向に登りつめて、遂に自ら身を殺すに至る者である。山本君は即ち此第三者に屬する者である。

■要するに、山本君は、本人の主觀よりすれば、斷乎として理想に殉じた高潔の人で衷心十分に滿足して死んだものと思はれる。然し之れを外から批評すれば、矢張り周圍の壓迫に驅られて此に至つたものと見るより外はない。

■そこで僕等の考では、總て肉を賤み、此

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

世を厭ふ思想は、自分の手の届かぬ葡萄をスッパイと云ふのと同じである。旨い物の食へぬ貧乏人が、粗食主義を唱道するのと同じである。

■斯ういふ風に考へるからして、僕等は山本君の死に對して深き痛ましさを感ずるのである。同時に又、それを救ひ得ざりし點に於いて、幾分責任の感も生ずるのである。

■　橋　浦　時　雄

■山本飼山と初めて知つたのは、早稲田大學の豫科の教室で、明治四十三年の九月だつた。爾來四ヶ年間、かなり親しく交つて居たのだが、直接手を握つて交際したのは僅かに一年半に過ぎず、異郷の文通も實に罕であつた。

■其の頃、飼山は戸塚の諏訪にある植木屋の離れの一室を借りて、貧しい自炊生活をして居た。周圍の杜の寂寞を破つては、しよつ中陸軍射的場の銃聲が響いた。穢い室の壁には、革命の歌とか、座右の銘とか、警句じみた文句の書かれた原稿紙なんかゞ貼つてあつた。

■飼山は基督教徒で、教會には反感を抱いて居たけれど、聖書とは一生涯離れなかつた。彼も一時は、宗教の餘りに諦らめ主義で、非科學的なのに飽たらないで、神を去り基督教から離れたが、然しそれはホンの暫くで、信仰生活を去つて物慾的な生活に入るといふ事は、彼には恐ろしい墮落のやうに思はれたのである。今年の初夏、彼から來た手紙の内にこんな文句がある。『僕は近頃ロマンチシズム、クラシシズムの思想に復歸しつゝある。カーライル、エマアソン、ミルトンを愛讀しつゝある。聖書を誦し讃美歌を歌ひつゝある。(中畧)僕は近代思想が嫌ひになつた。近代思想には強い現實味はあらう、併し余りに人間の醜陋な方面を讃美し過ぎ、若くは誇張し過ぎる。『神は人間に永遠を思ふの懐を與へ給ふ』といふ言葉が舊約聖書にあるが、僕は此の「永遠を思ふ」の懐を慕ふものである。人間の劣惡な情慾を離れて永遠に思ひを馳する事是が僕の日々の願である。』彼は亦、平生躰の痩せて骨ばつて居るのを寧ろ誇つて居た蓋し肥滿した健康体には、必ず强烈な性慾が宿るからだといふのである。

■彼れは貧乏で生眞面目で、女よりは寧ろ讀書の樂しみに馴れて居た。だから一見禁慾的な生活をして居たが、然し酒なんかは時に隨分暴飲した。禁慾は彼の日々の願ではあつたらうが、彼迚も人間である以上、いろ〳〵世俗的な趣味も煩惱も抱いて居たのだ。その死が如何にも物質を無視した結果の如く見ゆるから迚、僕には彼を全く浮世離れのした人間とは見做されない。曾て彼は『僕は余りに時世に遠い。而して時世に遠い事を以つて大なる誇と感ずる。空の空、空の空なる哉、凡て空也。日の下に人の勞して爲す諸の業はその身に何の益かあらん』云々と云つてよこした。即ち彼は斷然社會に非妥協の宣言をしたのである。然し僕が昨年の初秋に出獄して、彼と二年ぶりに面會した時などは、附近の洋食屋で盛んに肉を喫ひ酒を仰つて、將來の處世方針なんか話し合ひもし、その後も屢々卒業後の身のふり方などを書いてよこした。

■深く交はらない人達の前には、唯だ思索的な瞑想的な態度のみが現はれたが、時にはダヾッ兒のやうな偏執と、八つ當りをすることもあつた。僕には彼の情緒的生活は寧ろ頗ぶる混雜せるものゝ如く思はれる。彼に友人の少ないのは、一つはその孤獨生活の樂しみに馴れたセイもあらうが、彼の情緒的生活に割合に我儘な處があつたからでもあらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

洪水のやうに

徳永保之助

ふいご、
初めの日は面白くてたまらぬ、
ぶう〱と、
少年の細腕にありたけの力をしぼつて、
押したり引いたりした。
二日、三日、
長い時間のはたらきの疲れ、
私はめちやくちやにねむくてたまらず、
われ知らずゐねむりをした。
束の間の少年の夢、
戀人の女の子と遊ばうとすれば、
コツン！
拳骨のひどい痛さに、
びつくりして目がさめた。
子供心にくやしく、なさけなく、且つやるせな
く、
しぶい目から熱い涙がこぼれた。

いま思つても憎らしい、
くろんぼのやうな顔にどんぐり眼をひからした
奴！
私をなぐつた奴！

その日のかへり、
晩方の月島の渡船の中で、
見もしらぬ若いきれいな女が、
暗いふなべりにしやくり泣く少年の私をなだめ
すかして、
菓子さへくれた。
あの女、一体誰だらう？
私を知つてゐたのだらうか、
女は云つた、
自分の小さい弟にでも向ふやうに。
『お前どうしたの？
おなかが痛いの？そうぢやないと云ふの、
それぢや何をそう泣くの？
何がそんなにかなしいのさ？
妾に言つてごらん！』
女は私の涙をふいてくれた、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

けれど私の涙は、
女のハンケチをとほして、
止めどもなく大川のひろ〴〵したくらい流れに
落ちた。

流れの上を晩秋の冷たい霧が、河のねむりをさ
そふやうに罩めてゐた。
その中に船頭らの焚く火が、
水面のところ〴〵を
ラヴの火の流れのやうに眞赤にした。
はるか港の方の、見えわかぬ霧の奥から、
櫓の音が夢のやうに聞えて來た。
私は泣くまいとした。
船も私の心をなるたけ動かすまいとするやうに
音も無くすべつた。
けれど船べりにおどる川浪がぽちやぽちやと、
意地惡るい子供のやうに、
絶えず私のかなしい心にからかつた。
私はそれをきくと一層熱い涙が一時にあふれ出
した。

『もうおだまり！ね！
男の子が、——
今に世の中に出て、
立派なえらい人になるものが、
そんなに泣くもんぢやないのよ。』
女は云つた。
私はうなづいた。

あゝ、あの若い女はどこの人だつたらう？
あゝ女よ、
私は心からおんみに感謝する、
おんみがどこの人であらうとも、
私は終生おんみを忘れないだらう、
おんみの私にかけてくれたやさしい言葉を忘れ
ないだらう。
あの時のたゞ白く美しかつたおんみの顔よ、
對岸の、涙にぬれた、なつかしかつた築地海岸
の灯よ。
あゝ女よ、
少年の私を慰めてくれた、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

多くの人の中のたゞ一人(ひとり)の女よ、
私は今ふとおんみの言葉(ことば)を想ひ出した。
おんみは泣き止まぬ私に言つてくれた。
『今に世の中へ出て、
立派なえらい人となるものが、
そんなに泣くもんぢやないのよ。』と、
は是無論(むろん)一時の慰めの言葉だらうけれど、——
あゝ女よ、
私を見てくれ！
私は今二十五だ、
そしてやつぱり無一物の勞働者だ！
そして私は今でもやはり泣いてゐる、
私と、私と同樣に不幸な多數の人の爲に、
その人たちの悲慘な生活の爲めに。
しかしそれは子供(こども)のやうにぢやない、
聲もあげず、涙もこぼさないのだ、
イヤ、涙をこぼしても、
それは衷(うち)へ衷(うち)へと音(おと)もなく逆流するのだ、
そしてそこで血のやうにかたく且つ大きく、だ
ん〳〵大きくかたまるのだ、
確信となるのだ、
力となるのだ。
あゝ女よ、
私は無一物の勞働者だ。
しかしかう云つたとて、
おんみに對してそんなに私が恥ぢてゐると思つ
てはいけない。
實に私は私の貧乏を何人にも恥ぢない。
たゞ私は——われ〳〵はこのまゝではゐられな
いのだ。
私は深く考へてゐる、
勞働者お互ひの生活をあげるために、
われ〳〵は一緒(しよ)に何をしたらいゝかを、
何をどうしたらいゝかを、
私は考へてゐる。
あゝ女よ、
わが古き記憶の中なる戀しい女よ、
われ〳〵は先づあの大川の流れのやうな非常な
勢力を持たねばならぬ！
そして洪水のやうに氾濫せねばならぬ！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

地獄のドン・ジユアン

—『人と超人』第三幕梗概—

堺利彦

一

西班牙シイラ・ネヴアダ山に一群の山賊が居る其の首領をマンドザと云ふ。彼等は山越の道路に釘を撒布してそれに依つて通行の自働車のタイヤにパンクチユアを起させ、其の乗客を脅迫して金を取る事を商賣にして居る。

タナアとストレカアの自働車が此ワナにかゝるマンドザは傲然としてタナアに對し『己れは山賊だ。富者を掠奪して生活して居る者だ』といふ。タナアは早速それに答へて『我輩は紳士だ。貧者を掠奪して生活して居る者だ。サ、握手しよう』といふ。こんな調子でタナアとマンドザとは譯もなく友人になり、火を焚いて物語に夜を更かす。『山賊は固より變則な商賣です。所で變則な商賣には二種の人物がやつて來る。一つは今の社會に役に立たぬ者、一つは今の社會に善過ぎる者。即ち我々は社會の澱と上汁とです。澱は汚ないが、上汁は上等だ』などとマンドザは語る。マンドザはそれから猶自分の身上話をする。彼は曾て料理店のウエータアをして居たが、ルイザといふ女に戀をして遂げず、失望の餘り米國に行つて、そこで或男に勸められて、資本家の助を得て一つの會社を作り、今の此の商賣を始めたといふ。そして其のルイザといふ女は丁度ストレカアの妹であつた。それからマンドザは頻りにルイザを戀ふる歌を歌ひだす。タナアもストレカアも其まゝそこに寢て了ふ。

二

舞臺はこゝで一時暗闇になる。今度明りがさすと、十五六世紀の西班牙の貴族の姿が現はれる。それは即ちドン・ホワン・テノリオである。そして其恰好なり顔立なり、丁度ジヨン・タナアの樣に見える（ドン・ホワン・テノリオは十四世紀の人物で西班牙セヴイルの名家の子であつたが、提督ウルヨアの娘アナを誘惑したる後、遂に提督を殺した。其後敎會の僧侶等はドン・ホワンの亂行を憎み、彼を修道院に招いて殺して了つた。然し世間に對しては其の修道院に立てられてあつた提督の像が怒

を發して、ドン・ホワンを地獄に引きずつて行つたと言ふ事になつて居た。此話が西班牙、伊太利あたりで先づ色々と芝居に仕組まれ、後ち佛蘭西、英吉利、獨逸にも及んで行つた。それでドン・ホワン（英語ではドン・ジュアン）と云へば、放縱無賴なる無信仰の人といふ意味になつて居る。）

三

次に一人の老婆の姿が現はれる。恐ろしい寂しい處に來たが、こゝは何處だと聞く。ドン・ホワンが、こゝは地獄だと答へるので、老婆は大いに驚く。自分は生前に義務を盡し、名譽を保つて來た者であるのに、どうして地獄に來たゞらうと怪む。然るにドン・ホワンは、いや／＼地獄は名譽と義務と正義と、其他あらゆる美德の住處である。地上に於ける一切の惡事はそれら美德の名に依つて行はれる。だから其の報は矢張り地獄の外はないといふ。それから猶ドン・ホワンが、地獄の生活には肉體もなく、年齢もないから、あなたのお望みの年齢、容貌で暮す事が出來るといふので、老婆は廿七歳になりたいと云ふ。すると忽ちにして老婆は若い美しい女になる。そしてアン・ホワイトフィルドと見違へる樣な顏容（かほかたち）になる。是が即ちウルヨアの娘ドナ・アナである。

是で兩人互に驚く事などあつて後、そこに白い大理石の像が一つ現はれて來る。それが即ちアナの父ウルヨアである。ウルヨアの聲はロー・バック・ラムスデン其まゝに聞える。ウルヨアは石像になつてから一層世人に敬愛せられたので、それで今は其姿で暮して居るとの事。

それから今度はそこに地獄の魔王が出て來る。アナが驚くと、ドン・ホワンはナニ魔王といふ者は世間でいふほど怖いものではないといふ。魔王はメフイストの樣な姿をして居るが、どうやらマンドザにも似て居る。

四

是より四人の間に地獄と天國との事について種々樣々の問答がある。ウルヨアの石像は生前僞善者であつたのだから、天國にやられたのは當然であるが、然し天國は迚も退屈でやりきれないから今地獄に移住して來たのだと云つて居る。ドン・ホワンは生の力と宇宙の目的とを說いて、是非これから天國に行くのだと云つて居る。アナも只無暗

に天國に行きたがつて居る。魔王は死の力と破壞の力とを說き、兎にかく自分の方が多數だから結局は勝だと威張つて居る。

ドン・ホワン曰く『地獄は幻しの國である、幸福追求者の住處である。現實界の主人の住處たる天國と、現實界の奴隸の住處たる地上と、此の兩者から逃れて行く處が即ち地獄である。地上は人間男女が英雄や、神人や、聖者の飯事をする處であるが、然し彼等はいつも肉體の爲に其の極樂から引ずりおろされて了ふ。要するに、饑渴、寒暑、老病死等が人間を現實の奴隸にして了ふ。然るに此の地獄に來れば、最早そんな肉の壓制が無くなる。こゝでは人はモウ動物でなく、只靈魂となり、假空となり、幻想となり、無死、無齡、無體の者となる。そこで如何に美を說き、愛を語り、義烈を唱ふるも、決してそれに矛盾する樣な冷酷の事實がない。

『天國に於いては之に異なり、遊び事をしたり、體裁を作つたりするのでなく、一切の事物其儘に面と向ひあふのである。我輩は此の沼々たる虛僞より逃れ、俗惡なる幸福の追求より逃れ、而して未來永劫思索に耽らんが爲に、是より天國に行かんとするのである。』

『それぢや天國では、思索より外に仕事は無いか』とアナが聞いたのでドン・ホワン又曰く『イヤ、生の力の向上を助けるといふ仕事がある。生の力は元來盲目で、恐ろしい浪費をしたり、自らを破壞したりして來た。之を其目的に向つて進ましめる者は腦髓である。人間は臆病者である。然し宇宙の目的の爲に戰つて居るのだと思へば、其時はじめて恐怖が無くなる。各人は皆人類完成の爲に死ぬると云ふ事になるのである。』

此の目的といふ事からしてドン・ホワンの男女論が出て來る。『女に取つては、男は只子を作り、子を育てる爲の道具である。性の上より云へば、女は自然が其の最大の功業を繼續せんが爲に拵へた器械である。そして男は、此の自然の命令を最も經濟的に實行せんが爲に女の拵へた器械である。女は其の大昔の進化の過程に於いて、單性生殖よりも一層良好の結果を來さんが爲に、男性といふ者を發明し、分化し、創造した事を、本能的に知つて居る。然し男はそれ丈の職分を盡して、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

猶餘力がある。それが腦髓と筋肉とに行つた。そして女に相談なしで文明を作り出だした。是は男の方から見れば、單に女の目的を達する道具たるより以上の、何者かにならうとした企てゞある。』

ドン・ホワンは猶論じて曰く『一體生の力は自己を立する爲に無數の實驗をやつた。マンモス象を作り、人間を作り、二十日鼠を作り、メガセリウムを作り、蠅を作り、蚤を作つたが、生の目的は美と云ふ様な事にはなかつた。若し美が目的であるならば、鳥類は人間よりも遙かに美である。生の目的は正に腦髓にある。腦髓は生が自意識を生じ、自己理解に達するの器官である。丁度、幾世代の苦闘の結果として、眼といふ驚くべき器官が發達したと同じ様に、今は生の目的を見るべき心眼が發達しかけて居るのである。今日迄の所でも哲人なる者は常に世の尊敬を受けて來た。哲人は思索に依つて世界意志を發見し、又其の意志遂行の手段を發見し、又其の手段に依つて其の意志を成就する者である。此種の人物の外は、我等はモウ飽きはてゝ了つた。

『我輩が地上に居た時、醫學者も、神學者も、政治家も、皆我輩と分れて了つた。只藝術家とは數年の間相親しんで、少からぬ利益も得たが、然しそれが例の婦人崇拜に歸するに及んで、僕は又それと分れた。美を崇拜し、幸福を追求し、婦人を理想化するが如きは、生の哲學の爲に何の役に立つものでもない。

『然しながら我輩は、猶其の婦人から學ぶ所があつた。我輩が婦人に對する時、我が腦髓は否と云ひ、我が道德は否と云ひ、我が良心は否と云ふに係はらず、猶生の力は我輩を捕へて彼女の腕に投じた。我輩は正に生の力の不可抗力なるを悟つた。

『生の力が結婚を尊敬するのは、結婚が最大多數の子供を作るべき方法であるからである。名譽の節操の、道德のといふが如きは、生の力の意に介する所ではない。結婚は人間制度中の最も淫逸なる者である。そこが結婚の世に持てはやされる所以である。結婚は即ち溫良貞淑の見かけを餌にして男を釣るワナである。

『兩性關係に於ては、宇宙の創造力は男女個々の事情なんどを無視して了ふ。玆に一對の男女があつて、それが全然相識らざる間柄であらうとも、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

或は言語を異にし、人種を異にし、年齡を異にし、性質を異にする者であらうとも、生の力は猶それを驅つて一瞥の下に互に相擁せしめるのである。親々の協議に依り、本人同志は何も知らずに、結婚の取結ばれるといふ習慣も、之に依つて說明が出來るでは無いか。軍人が敵を殺す時、何も個人的に怨がある譯ではない。それと同じく、女が國の爲に盡す時、何も必ずしも個人的に其男を愛せねばならぬ譯はない。要するに兩性關係は個人關係に超越したものである。』

ドン・ホワンは更に一轉して自己に就いて語つて曰く『我輩は、自己より以上の者を考へ得る時にそれの實現の爲に勉め、或は其の爲に道途を淸むる事をせずには居られぬ。それが我輩の生の法則である。それが卽ち生が我輩の心中に働いて、より高き、より深き、より廣き、より强き自識に達し、又より明かなる自己理解に達せんとする努力である。

『吾輩の指が我輩の一部分であると同じく、我輩は亦實に自然界の一部分である。そして我輩の指が我輩の物を攫む器官であると同じく、我輩の腦髓は亦實に自然界が自ら理解せんとする器官である。故に哲學者は此の力に捕へられて居る者である。生の力は哲學者に告げて云ふ。我は從來無意識の間に無數の事をして來たが、今後は自己を知り、目的を知り　道を擇んで進みたいと思ふ。そこで我は一種特殊の腦髓卽ち哲學者の腦髓を作つた。哲學者よ、我が爲に之を勉めよやと。されば哲學者は自然界の水先案內である。地獄に在る者は只波に任せて漂ふが如し。天に上る者は自ら梶を取るが如し。』

斯くてドン・ホワンはいよ〳〵天に上らんと欲して、石像に其道を問ふ。石像は答へて、天國と地獄との境目は、只事物の見方の差である。眞實そこに行きたいと思ふならば、どの道からでも直ぐ行かれる、と敎へる。そこでドン・ホワンは一禮して行きかゝる。するとアナは、私も一緒に行きたいと云ふ。然しドン・ホワンは、自分の天に上る道は分るが、人の天に上る道を見つける事は出來ぬと云つて消えうせて了ふ。

五

跡に魔王は稍嘆息して石像に向ひ、『どうも、あ

ゝいふ生命崇拜者連は皆んな行つて了ふ。奴等にはどこか不自然な所がある。奴等の説法は實に危險です。あの超人間の追求に御注意なさい。あの思想はツマリ人間全體を輕蔑する事になる』といふ。すると石像は『其の超人とは何だ』と問ふ。『イヤそれは生命崇拜連の近頃の流行で、あの獨逸の氣違の、えゝ何とか云つた、おゝあのニイチエに天國で會ひませんでしたか』と魔王はいふ。『そんな者は一向聞いた事もない』と石像はいふ。『其ニイチエが大の生命崇拜家で、それが超人を擔ぎはじめたものです。彼も初はこゝに來て居たが、こゝでワグネルと喧嘩をして、とう／＼天に上つて了つた。然しそれも結句厄介拂であつた。サア是れから私の宮殿に行つて、あなたの御來降の祝賀會を催しませう』と、それで二人は消え失せる。

アナはそれを呼びとめて『超人は何處に居る』と問ふ。『超人はまだ創造されて居ない』と魔王は答へる。『恐らく永久に造られまい』と石像は答へる。

跡にアナは『まだ造られて居ない！。それではまだ私の仕事がある。私は將來の生を信ずる。あゝ父よ超人の父よ！』と叫ぶ。

六

是にてアナが消えうせると、再び舞臺は眞暗になり、更に漸く光がさして、『自働車！自働車！』といふ聲が聞える。新しい自働車が又一臺來たのである。タナアとマンドザとストレカアが眼を覺す。

山賊の手下共は『今度の車には男が三人と女が二人乘つて居る。そして別の車に兵隊が乘つて供をして居る』と報告する。タナアは『ハ、ア、それは供ぢやない。君等を逮捕に來たんだ。昨日我輩にも、それを待つて一緒に行けといふ注意があつたけれど、我輩は急いで居たもんだから』といふ。サア大變といふので皆々騷ぎだす。

マンドザはそれを制してタナアに向ひ『あなたは私を敵に渡しはしますまいね。昨夜は貧者の掠奪者が富者の掠奪者の手に在つた。そしてあなたは私と握手した。』『宜しい、我輩は何も君の罪を問ふ事はない。我輩は只樂しくこゝで一夜を過した丈の事だ』とタナアは答へる。

そこにアンと、ヴアイオレツトと、ヘクトルと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

が、自働車から降りてやつて來る。『おゝジャックが』と先づアンが叫ぶ。『まあ好かつた。然しバンクチュアをやりましたね。道路は丸で釘だらけだもの』とヘクトルは云ふ。『あなた此處でこんな人達と何をして居たの』とヴァイオレットは訝かる。『あなたナゼ默つて逃げだしたの』とアンは攻めかける。『君の跡を追つかけるのに、ホワイトフィルド孃は丸で探偵の樣に機敏でしたよ』とヘクトルは云ふ。『生の力だ!』。僕はモウ駄目だ』とタナアは嘆息する、『まあ好かつたねえ。僕は君が屹度山賊につかまつたと思つたよ』と後れて來たオクテヴィアスは云ふ。マンドザは昔しホテルで此人達を皆知つて居た。

兎かくする中、兵隊がやつて來て、山賊共を不審げに見やつたが、『是は私の從者です』とタナアが云つたので無事に濟む。(完)

獸類は、彼等も人間の血族だといふ、ダアキンの立證に由てその復讐を遂げ、盜賊は、マルクスが紳士閥の掠奪を論證したので、その復讐を遂げた。(バアナアドショウ)

■廢　墟　(小川未明著)

『廢墟』一編は、小川未明氏の近作にかゝる小説集で、短篇十一を集めてある。そして卷頭の『噓』は、自分が近頃に無い興味をもつて讀んだ作である。

曾て氏の短篇集『白痴』の中の一篇を評して、一面に非常な深酷を有し乍ら、他面頗ぶる徹底を欠き、一方痛切な煩悶を抱き乍ら、一方極めて淺薄皮想な諦らめに逃避して居る事を論じた。然るに『噓』に至つては、その眞實と深酷とは、驚くべき力で讀者に迫り、その徹底的にして辛辣鋭利なる批評のメスは、直ちに入つて社會組織の根底を作せる不正邪惡を貫き抉つて居る。

『凡ての罪惡は、畢竟人間の無智と、無理由の强迫とがさせることです。』

『彼の子供の父親が無智であつて、無同情であつて、子供に空腹を感じさせ、その子供のした行爲を惡いと云つて叱るのが不正當であるなら、人間が空腹の者に何等の同情を有しないばかりで無く、其等の人々の行爲を監視する社會は固より、道德法律もまた不正當なるものでなければならぬ。』

『此時私は人を指圖して、他の人にさせる事なら、どんな危險な事をしてもいゝと思つた。どんな惡い事をしてもいゝと思つた。』

自分は此の『噓』の一篇を以て、今年の文壇に於ける傑作の一だと云ふに躊躇しない。但だ『噓』に於て、こゝまで突込んで社會の眞相を把握した著者が、此の思想、觀察、批判を、如何に他の作物に現はしつゝあるかは、甚だ興味ある問題であるが、實はまだ全篇を通讀して居ない。隨つて『廢墟』全體に對する批評は、自分のいま爲し得ぬ處である。(寒)(金七十五錢牛込區矢來町中の丸新潮社)

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

罷業の宣言

Pataud et Pouget

荒畑寒村

三

火曜日の朝に目醒めた巴里は、さながら痲痺せるものゝ如くだつた。夜の無感覺ぱ晝間になつても止まぬ許りか、却つて益々增して往つた。沈默は暗黑と共に消へ去らず、巨大な獸のいつものやうな呟き、早朝から活動の歸來を告ぐる、種々な騷音の諧調は街から立ち上らなかつた。前日、個人的の發意と衝動の結果たる椿事の爲め、一齊に勃發した勞働の休止は、今や勞働組合の決議の感化を示せる、組織立つた方法で統一せられ、且つ一般的とせられた。

民衆の憤怒は實にその絕頂に達し、そして非常に此の運動を速めた。民衆は滿足と救はれたやうな感情を以て、自ら同盟罷業に投じた程政府の犧牲に對つて深き憐愍を感じ、政府とその手先に對して烈しき憤怒を抱いて居た。然し、こういふ事件の爲に、痛ましい災害を受ければならないのは、誰よりも實に彼等自身の家族であつた。勞働者にとつては勞働休止の直接の結果たる收入途絕に加ふるに、同盟罷業は種々な不便やら災害やらを齎らした。然も彼等は一切是等に頓着せず、勇んで冒險を敢てした。彼等が主な役を勤める是からの出來事の、種々な苦しみ惱みをも、甘んじて堪へ忍ばうと決心した。

紳士閥は流石に穩かならぬ想ひに、此の爭鬪の破裂を見ない譯に往かなかつた。彼等には勇氣を起さしむるの戰志無く、笑つて難に赴むかしむるの理想が無い、その唯一の夢想は、只だ特權を煩はされまいとするに在つた。今や彼等が自己を威嚇して居る罷業に於て、明らかに認めたものは自己の生活、習慣、快樂に加へられんとする攪亂であつた。それに亦、彼等は自己の利害が危ふされた場合の外、社會的爭鬪をその眞實の力に據らないで、單にその惹起せる不便と困惑から判斷するといふ風だつた。彼等には折角芝居へ往つたら演奏者が同盟罷業をやつて居たとか、競馬間際になつて馬丁が同盟罷工をしたとか、そういふ方が、大きな港の運輸を止めた船渠業者の罷業よりも、更に重要なのであつた。それ故此の總同盟罷工に依て、如何に彼等が嚇され、また動搖されたかは、容易に想像されるのである。が、寢起きに非常に嬉しかつたのは、新聞紙がそれでも出た事だつた。尤も新聞自身が、明朝は果して發刊出來る否や頗ぶる不定で、職工が既に罷工に加はれる以上、畢竟時間の問題だとは云つて居るものゝ、兎に角發刊されたのは善い辻占である。然るに、彼等を呆然自失させ、その初めの喜びを曇らせたものは、街路のガス燈が點きつ放しの事であつた。前夜點燈夫は平素のやうに點燈し廻つたが、眞夜中過ぎてから、消しに往くには及ばないと寢込んで了つたのだ。その外、騷ぎは彼方にも此方にも起つて、その度每に彼等を驚駭させたが、皆な自分達の心持で考へては、恐れたり嘲けつたりして居た。

地下鐵道はもう動かなかつたが、是は特に屈從的な連中で運轉されて居た。革命派は辛辣な皮肉を以て、隧道內に猖獗を極むる肺結核と安い賃銀とが、此の連中をこうも卑屈忍從ならしめたのだと云つた。その殆んど唯一の勞働組合は、會社が承認して作らせた保守的なもので、革命派の組合は絕無と云つても宜かつたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

それでも首都の鐵道は運轉しなかつた。朝、此の忠實な連中が車輛を運轉させやうとすると電流が斷へて居る爲に出來ない事が解つた。夜間は鐵栓を解くに利用せられ、電力は最早や電線に通ぜず、おまけに發電所は休止して居る。そして職工が大急ぎで強力の發電機を用ひやうとすると、是れには亦、職常な破損が加へられて居る事が發見された。即ち我る個處には金剛砂が投入せられてあり、機械の一部分は分解され、他は短絡されて居た。で、是は、發電機を用ひるのはよし不可能で無いとしても、尠くともやらんとする者に危險だつたほど有效に行はれて居たので、職工は單に之が修繕にのみ從つた。

電車も乘合自働車も走らなかつた。夜間、勞働組合は諸處に多くの集會を開き、即時同盟罷業を行ふ決議をした。故に第一に着手すべき倉庫に於ては、極めて少數の勞働者しか居なかつたが、一方、興奮せる群衆は門外に待ち構へて、表面同志を裝へる仲間が業に就かうとするのを、極力防止せんと決心して居た。

鐵の響きが調子を作る牛乳箱の不秩序な、そして動搖する列は、拂曉の灰色な光の中に、街の石を亂さなかつた。

其前夜、勞働組合は、トラスト會社、若くは私人の雇人が、是等の車を動かさないやうに手配をした。他の貴族的な、商業的な區では亦、不愉快な不安なボイコットを受けた。塵芥箱は鋪石道にヒックリ返つて、汚物の山をなした。是れに反して、平民的な、勞働者の區では、街路掃除夫はいつものやうに働いて、家々の塵芥汚物を綺麗に浚つて往た。罷業の苦しみが一層重い區を選んだのは、市の塵芥車の馭者のみでは無く、同區に於て、市の街路掃除夫は、日常の撒水と同じく、街路や並樹路の掃除を止めて了つた。多くの勞働組合は、是と同種類のボイコットを實行したのである。

勞働者はこうして、如何にして階級闘爭を必要とする明らかな了解、狀態に適した行爲に聯結すべきを知つて居るといふ事を示した。總同盟罷工は其目的として、此の道德的示威運動の外、物質的方面に於てその敵手を攻擊し、その必要と快樂とに於て彼等を攻擊すべく、勞働階級の崩壞力を使用せねばならぬ。社會組織の複雜せるが爲め、敵を打てば勢ひ反動で自分も打たれる事は承知ながら、勞働者は輕い心もちで、此の結果に當面せんと決心した。然し、固より彼等と雖も、總同盟罷工の原則を危ふしさへしなければ、出來るだけ此の反動を避けんとはして居るのだつた。此の動機から行爲した勞働者は、懇ろな友情を通じて（塵芥掃除夫や街路掃除夫の如く）、勞働階級の區に於て、勞働停止の不便を輕減せんと努めた。

激烈な闘爭に入つて往つた階級的同胞の間に必要な、此の一の明らかな視覺は、總同盟罷工がとりつゝあつた方向の記號であつた。その純粹に分解的で一方に偏せる初めの方面に、有力な協同一致、社會再建の方面は隨はんとしつゝあつた。

暫くの間、まだ始まりだつた闘爭の意義は、消極的行爲によつて示せる如く、勞働階級の全力の示威に存在した。倦まざる活動の隨へる靜止！。そして此の靜止は、層一層地歩を占めて往つた。麵麭屋の店では麵麭が不足する、大部分仕事をやめた勞働者を置き代へやうと努むる主人は、自ら仕事に從はねばならなかつた。然し多くの麵麭屋では、罷業に馴れた職人は、仕事をやめる前に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

爐を一時使へぬやうにして往つた爲め、多くの麵麭製造業者は失敗して了つた。

屠獸業者の間では、肉の飢饉はまだそれ程で無く、罷業は僅かに、職人の少數、屠獸業者の助手がいくらか罷業した位に止まつて居た。乾物商の間に、また大きな食料品倉庫に、同じ事が流行して、極めて僅かな職人しか、仕事に就かなかつた。朝の防害は、市場に平生の運命をもたせなかつた。そこでは、日毎の混雜と喧騷の代りに靜肅があつた。近隣に於ける園丁は誰れ一人、椿事を恐れて出て來るものは無く、多くの人々は旅行を差し控へた。かうして、若しそれが、今猶ほ流入せる地方からの委托販賣の爲で無かつたら、市場は頗ぶる見すぼらしかつたに違ひない。

此の欠乏は、凡ての區に反響をもつた。青物商、果物商、及び食料品商は、極めて僅かの供給しか受けなかつた。

かうして、罷業の初日から、徵候的短縮が緊要な商業たる食料品商賣に影響した。そして、胃の問題は何よりも重要なので、今後の飢饉の先驅ともいふべき此の徵候は、更に一層不安を强め、危惧を增すのみであつた。勞働階級の靜止の事實が、それ自身を現はすと殆んど同時に、また自ら曝露した此の擾亂は、勞働者の力の有力な證據であつた。社會に於ける一切の仕事を爲せるものは勞働者であつた。彼等はその首を軛に壓せられ、常に地上に曲り、終りも休みも無く、堅い畦を耕やし、汗で是れを肥やす馱獸である。そして玆に、刺針の下の苦役に疲れて、新しい地の上に軀を伸しながら、その頭をもたげて將來を眺むる獸が居る。彼が强くまた善い勞働者であり、彼れ無くしては何物も無い事を示した後、彼は萬事たるを求むるの驕傲を敢てせんとしつゝあるの乎。現在に於ては、彼は只だ消極的な抵抗にのみ據つた。

產業の區や、市外や、また近傍の地方に於ては、勞働者は散逸し、そして高い煙突は最早や工場の上に黑雲を吐き出さない。往時の職業を思ひ出させる美術的工業や、『巴里品』の製造と關係して居る多くの職業や、彫刻師、塑像家、寶玉商、製革商、青銅業等の工場が一杯あるマレイや、タムプルの郊外や、又は近傍の地はガランとした。アントアヌ市外を割つた雜沓せる街や、區に於てもまた、美術品製造家の工場等は空しかつた。ピエーヴルの岸のセン、マルセル區では、勞働者は仕事をやめ、グラシエールでも靴工場、鑄金工場等の間に、同じ事が起つた。

ボーテンにも、アウベルヴエイエにも、製藥工場、石鹼工場、マツチ工場等、皆な休業だつた。セン、ドニでも、建築工場や他の五十の產業的囚人の間に同じだつた。そこでは亦、ブルターニユや其他からの移住民が皆去つて了つた。イブリーやバチニアルの鍛冶職は休業する、するとブウロン、アルキユルの洗濯業、ルバロアやピユトウの自働車製造工がすぐ之に倣ふ。

何處でも！、何處でも　。凡ての工場、凡ての會社、凡ての製造所に、勞働休止は生產の熱に續いて起つた。勞働者は單に腕組みしたばかりである。それでかうなのだ！。

それにも拘はらず、此の一齊の罷業は凡ての部分に、望める敏活をもつて行はれなつた。で、多くの場合、入るのを拒んだ者を强ゆる代りに、頑固な奴を戶から突き出す、即ち强ひて押し出すのが必要だつた。此の行爲は穩かに行はれた。勞働組合は同盟罷業の決議の、一般に實行されたのを見る責務を帶べる委員團を任

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

命した。是等の同志は區から區へと向ふ罷工者の團体に對して組合の中心として行動し、製造所や工場を視察しては罷業の完成を確かめた。仕事の繼續せる處へは、示威運動者は驀然として闖入し、直ちに調帶を切斷し、轉路器を轉換し、蒸汽を放散し、火を消して了ふ。こういふ豫備手段をとつて置いて、それから心無くその勞苦を續くる者に、彼等の行爲の非社會的なるを說き、勞働者が相互に負ふて居る協同一致の欠如を責めた。彼等が、自身を殘害して居る此背信の爲に、艱む事を了解させんと努めた。そして此の短かい勞働組合道德の傳道を、『去れ諸君、凡て此處を去れ』の叫びで結んだ。

時には、委員も反抗的態度に會つた。忠實な職長や、その特權に惑溺して居る資本家や、心無き勞働者さへも差出て、罷工者を追ひ返し、その進入を阻めんとした。是は小闘爭、騷擾を惹起した。次で雇主側で短銃を取り出し、或は侵入者を脅嚇しやうとすると、直ちにもぎ取られて了つた。然しこういふ椿事の中で、悲慘な結果を生ずるものがあつて、資本家が官憲の保護を請ふたにしても、それは甚だ稀れであつた。官憲は保護要求に忙殺され乍らも、同じやうに危險な數百の異つた部分に、巡查も軍隊も送る事が出來ないので、孰れを先にし孰れを後に廻すべきか、全く困じ果てゝ居た。既に政府が取つた手段は、不充分且つ無効だといふ事が解つた。成る程、騎馬巡查は市內を隈なく巡視して居るし、軍隊は多くの重要な位置に屯營して居る。然し、放たれたる原素の如く、旋風となつて驀進せる委員は、彼等の前を盲目に直進しやしなかづた。彼等は如何に伏兵を避け、巡視の眼から遁れて潛むべきかを熟知して居た。

い、折を見ては、彼等は寄せ返して左右に進み、必要な時には相別れて又何處かで結合する。彼等は武裝せる兵力に反抗せず、またその前には引き退いて戰ひを避け、更に前進して仕事を續けた。此の遊びに、政府の軍隊はすつかり弱つて疲れ果てた。その上更に無用な、そして無効な前進やら背進やらで、ヘトヘトになつた。何故なら、大抵の場合、彼等が命ぜられた場處に到達すると、既に罷工者の襲擊が終つて、殘つて居るのはその跡のみだつたから――。然るに罷工者側には、發意と自發との優秀を有つて居たので、成功に必要な敢爲を行動に與へ、曾て單調な反覆や、始終同じ行爲にのみ出でなかつた。

かうしてその行動を變ゆる爲には、彼等は工場を出ると、更に吳服屋や商品陳列所を襲つた。彼等は凡ての戶から闖入して、陳列室を躍り廻り、猶も仕事を續けて居る職工を追ひ捲つた。此の上の損失を恐れた支配人は、品物を投り出した上直ちに鐵窓を閉ぢた程、彼等は商品を容赦しなかつた。そして、かうして巴里の街に投げ出された勞働者、商店員の群れは、興奮を增して往つたのだ。臆病な家庭勞働者の或るものが、この騷動から遁れて家に歸つた傍には、他のものは之が自分の調子と合つて居るのを見出して、初めは單に好奇心からだが、やがて街の興奮に導びかれて罷工者や示威運動者と一緒になり、そして一層熱心になつて、勇んで他の同志と聯合した。

その日、大都が呈した種々な、喜劇と悲劇との混つた光景の中で、特に目立つたものがあつた。その舞臺はマデレエヌとオペラ廣場との間で、時は晝の十二時と一時との間であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

此の區に多い銀行や、貴重品の商店は、多くは氣遣つて戸を開かなかつたが、やはり茲に多い女帽子や衣服の仕立屋は、その店員に命じて仕事を續けさせた。食事時に、女工は恐い物見たさに、相互に威勢を付け乍ら仕事室から出て見た。いつも活氣立つて、面白そうな笑ひ聲の高い料理店はヒッソリとして、低い話し聲しか聞かれなかつた。それに出來る物も、極めて僅かだつた。衣服業の罷工者――主に裁縫師――は、是れこそ勞働者全体を自分達の運動に加はらせるに、絶好の瞬間だと見てとつた。

朝方、此の區に於ける彼等の努力は失敗に歸した。ペイ街からマルゼルブ並樹道まで群集して居た、警官や軍隊の警備は彼等の活動を阻めたのだ。然し、今や此の同じ罷工者は區の習慣に馴れたので、仕事室への歸りに先だつた散歩の時間を利用した。彼等は女工の間に混り、狀態を説明し、そして彼等を『同盟罷工萬歲』の叫びに導いた。此の眞面目半分、冗談半分の叫びに驚かされて、之を止めようとしたが抑々官憲の不運で、是が爲に初めは面白づくでやつて居た事が生眞面目に變つた。やがてペイ街は主に女の群衆に滿され、激昂し嘲笑して容易に仕事に歸らうとはせぬ。此の闘志は無いが多數を恃んで、武器としては輕い洋傘をふり廻すのみなる群衆に對つて、巡査指揮官は不手極にも暴力を要ひた。彼等は巡査に命じて容赦なく亂打させた、男は之に當面して女を保護したが、部分的に成功したのみだつた。

それは實に野蠻な喧嘩だつた。女等は地上に打ち倒され、そして蹂み躙られた。他は亂打に恐れ狂つて、殆んど恐怖に患ふまで、心と神經との反動を受けた。恐慌はペイ街から、附近の街に擴がつた。女が巡査に打ち倒されたといふ噂ば、萬人の憤怒を呼び起しつゝ各處に伸びた。戸を閉ぢてまで職工を引き止めようとする雇主の努力にも關せず、仕事がまだ續いて居る工場を空にするには、只だ是れだけで充分だつた。激昂し憤怒せる女工は雀のやうに散つて了つた。彼等が女主人公でもあり犧牲でもあつた椿事の反覆は、興奮の動機に對して新しい苦難を加へた。

こうして醱酵は、示威運動の旋風で烈しくされた同盟罷工の事實からばかりでは無く、危機を除かうとした政府の手段の爲に擴がつた。それ故、萬事は巴里に叛亂中の都の光景を與ふる爲に結合し、その勞働と運輸の大組織の脉は、全き休止に近づきながらだんだん低くなり増さつた　（完）

■チョコレエト兵隊　（伊庭孝譯）

先頃、伊庭一座が有樂座に上場して、好評を博したバアナアドショウの脚本『武器と人』を、伊庭孝が飜譯したものである。ショウの作物は、僕自身は嫌ひである。殊に吾々同志の間にもて囃されるやうに、ショウの作物が非常に革命的だなぞとは到底思へない。然し是れは、勿論僕一個の好惡の問題で、ショウの作物の價値とは關係しない事だらう。

伊庭の飜譯は甚だ流暢明快で、ショウの喜劇の特性ともいふべき、皮肉、輕快といふやうな點は、非常によく現はされて居る。そこが此の譯のメリットだらう。（寒）（金四十錢京橋區尾張町一丁目警醒社）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大久保より

寒

■本號で大正二年もお終ひだから、世間並に本年掉尾の大活躍とでも云つたやうな、すばらしい雜誌を拵へなければならない譯なんだが、第一に大杉が氣管を惡くして發熱三十八度五分、未だに床を離れない始末だし、僕は僕で喰ふ方の仕事が急がしくて手が廻らぬ。世間の人も同じと見えて、却々玉稿が集まらない。そこで今度も安成二郎に編輯をやつて貰ひ、四苦八苦して纒めたもの即ち本號で、恰かも飜譯號の如き觀があるのは、如何にも怠けたやうで極りが惡い。然し、來年からは屹度身を入れて勉强するつもりで居る。

■卷頭の『必然から自由へ』は、大杉があれを批評しつゝ議論を進めて往かうとした骨子なのだが、病氣の爲め遂に果さなかつた。どうか新年號に現はれる『生の創造』を俟つて頂きたい。大杉は亦『山本飼山の死』に就ても書く筈だつたが、それも病氣でやはりダメだつた。佐藤綠葉は新年號から、小說『人間屠殺所』(曾て本誌へ梗概を出した)の、全譯を連載する。僕の飜譯小說(?)は、まだ〳〵先が長いのだが、些し不都合なのでもう止める事にした。

■先頃堺が連載して居た、ショウの『人と超人』は、愈々十二月初旬に出版される。隨分念を入れたものだから、先づ以て大した間違ひは無からう。本號の『地獄のドン・ジュアン』は、難解な三幕目夢の場の梗概である。尙ほ來春早々、此の脚本は伊庭一座によつて、上場されるそうだ。

■安成二郎は來年から、大に小說を書くそうだ。綠葉の評に曰く『何をやつても巧く往かない事が解つたナ』然し、種族の維持だけは、甚だ巧く往きつゝある。二回續いて原稿を出したので、名聲頓に大久保に揚れる貞雄は、雜誌『現代詩文』の讀者會へ出て、余興に新体詩の朗吟をやるといふ廣告が同誌に出て居たので、大に憤慨して主筆服部某を捉まへ、此頃は非常に偉くなつたから新体詩の朗吟などはやらぬが、賴むとあれば一場の講演位はしてやつてもいゝといふ譯で、廿三日その會の席上で滔々一時間余、島村、相馬なんといふお歷々を向ふへ廻して氣焰を吐いたさうだ。

■七日、大杉、堺、橋浦、二郎、僕、それに故人の親戚友人十人ばかりで、山本飼山の遺骸を落合の火葬場に送つた。戸山ヶ原を横ぎつて往くと、樫や、櫟や、欅や、栗などの、黃にすがれた霜葉からは、雨の雫が降るやうに落ちた。風は冷たく、灰色の雲は低く垂れて居た。橋浦は『山本と僕ともう一人とで夜茲へ酒を持つて來て、焚火をし乍ら飮んだ事があつた』といふ。『それはいつ頃だ』と聞いても、耳の遠い彼は一向構はず『僕が出獄して歸國する折、山本は停車場まで見送つて吳れた。その時、僕が、君は大分影が薄いぜつて笑つたが、ホントになつて了つた』と云つて黯然とした。

■僕等五人だけ分れて、歸途、燒芋屋へ上り込んだ。そして南京豆だの、燒芋だの、柿だのを喰ひながら、故人の事など話し合つた。朝からうす暗くて、いつ夕暮になつたとも知らぬ間に、柏木停車場へ來たらもう燈火が點つて居た。森岡は出獄して間も無く、發狂して自殺し、山本は早稻田大學を出ると、ぢきに今度の最後を遂げて了つた。狂ひも得せず、自ら殺しもし得ない者は、悲哀を裹んで進むの外は無い。

■本誌は來年から大に內容を精選する。僕等が勉强するのは固より、氣に入らない記事はドンドン刎ねて貰ひたい。——一一、二八——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

■寄贈雜誌■

創造　馬上大學　第三帝國　生活と藝術
青鞜　帝國文學　新公論　實業之世界
新潮　新佛教　新文林　人生と表現
白樺　モザイク　東洋哲學　ダイヤモンド
假面　新世紀　新眞婦人　ナショナル
創作　現代詩文　圖書評論　ウォールド
護教　婦人評論　英語青年　内外教育評論
銀磬　文章世界　ニコニコ　東京魁新聞
凍野　とりで　村落通信　鑛業及鑛夫
獨立評論　新東京　世界雜誌　公友新報
自由評論　日本婦女新聞

■十月號目次■

獨善主義者に(詩)……寒村
科學的理想(評論)……安成貞雄
獅子と兎(小話)……安成二郎
胡麻鹽頭(雜錄)……堺利彦
伊庭孝一座(批評)……寒村
鎮(小說)……德永保之助
小川巡査(小說)……△○生
大久保より(雜錄)……榮
虐殺の翌朝(小說)……荒畑寒村

■本社取次書籍■

本社に於て次の新著を推奬し、取次販賣をする。御注文は成るべく振替貯金によられたい。價は定價通り、郵税は當方もち。

▲創造的進化　ベルグソン著　金子馬治・桂井當之助譯　金一圓八十錢
▲エルジエ、リントネル　ミヒヤエリス著　佐藤緑葉譯　金八十錢
▲人と超人　ショウ著　堺利彦譯　金一圓廿錢
▲エミール　ルソウ著　三浦關造譯　金一圓六十錢
▲生命論　永井潜著　金二圓五十錢
▲ノラ　イブセン著　森鷗外譯　金一圓三十錢
▲ニイチエ研究　和辻哲郎著　金二圓五十錢
▲日の出前　ハウプトマン著　橋本青雨譯　金一圓
▲廿六人と一人　ゴリキー著　野尻抱影譯　金四十五錢
▲オスカア・ワイルド　和氣律次郎譯　金廿五錢
▲一讀を乞ふ　若宮卯之助著　金五十五錢

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵税を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割増の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正二年十一月三十日印刷納本
大正二年十二月一日發行

府下大久保百人町三五二　近代思想社内
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　教文館印刷所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

權威ある純女流文藝雜誌

青鞜

XII

生の神の賜　山田わか譯
わがまま（小說）　野　技
粉雪（小說）　小林哥津
若吉の話（小說）　藤岡一枝
昔の男に對して（感想）　西崎花世
徹底せざる婦人問題　丸島春枝
天　A　日に（短歌）　三ヶ島葭
薄暮の音樂（詩）　望月れい
青鞜社補助團會員募集
Kと私　らいてう
ソニア・コヴアレフスキイ自傳　野上彌生譯
青鞜社詠草　川田よし等
イワノフ（戲曲）　瀨沼夏葉譯
圓窓より（感想）　らいてう
劇評　木兎女あげは
編輯室より　同人
表紙（三度刷木版）

發行所　青鞜社　東京府下巣鴨町　振替東京二一一一六

定價金二十五錢　郵稅金一錢五厘

發賣所　尚文堂　東京市神田區　南神保町十六

生活と藝術

十二月號

■街上不平（詩）　土岐哀果
■パンの皮（小説）　仲田勝之助
■滯阪雜記（感想）　島村抱月
■臆病者の記錄　上司小劍
■ブーニン小品　播磨檜吉
■街を行きて　西村陽吉
■怠惰の權利（評論）　荒畑寒村
■ショウの超人（同）　堺利彦
■評論家の態度　稻毛詛風
■ルッソオとトルストイ　T・A
■新らしき歌　青年百余家
■北海道より　大島生
■エランダにて　矢口達
■MEMO　哀果生

定價一冊十八錢　送費金一錢

齋藤茂吉	國木田獨歩	三木露風	土岐哀果	石井柏亭	三木露風
赤光	**獨歩詩集**	**露風集**	**佇みて**	**歐州美術遍路**	**白き手の獵人**
價九十錢 稅八錢	價七十錢 稅六錢	價九十錢 稅八錢	價六十錢 稅六錢	價一圓八十錢 稅十二錢	價一圓 稅八錢

發行所　東京市日本橋區檜物町九　振替東京五六一四番　東雲堂

丁抹カリン・ミヒアエリス作

新刊

エルジエ・リントネル

既成

佐藤緑葉氏譯・小林徳三郎氏畫

新らしき婦人問題の提供

カリン・ミヒアエリスは丁抹の女流作家なり。瑞典のエレン・ケイ女史が戀愛の自由、個人生活の完成を叫び、眞つ甲より人生に命令せんとするに對し、カリンは小説によりて婦人の内部生命を語り、其根本に横る秘密を曝露せり。著者曩に『危險なる年齡』を著はして歐洲の讀書界を沸騰せしめたるが、本書は更に大膽に、一層深刻に婦人を解剖して、餘す處なく其眞相を發表せり。本書はカリンが新らしき婦人問題に下したる鐵案なり、何人も本書を讀まば、得る處多く、敎へらるゝ處多く、又考へさせらるゝ處多かるべし。

赤裸々なる内生活の告白

▶四六版クロース美装函入——定價八十錢郵税八錢◀

大好評

離婚せる四十女の

思ひ切つた告白

第五版

優美裝幀函入三百卅頁・定價八十錢送料八錢

本書は曩に「危險なる年齡」と題して丁抹に於て出版せられ大膽なる現實曝露なりとて歐米の讀書界を驚倒せしめたるもの。著者カリン・ミヒアエリス女史。小野秀雄氏譯なり。卷頭黒岩周六氏の四十頁に亘る大論文を掲ぐ。　上記リントネル共に忌憚なき告白を見られよ。

發行所　東京神田松下町一〇　振替東京四一八四番　以文館

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想
第二卷第三號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年十一月三十日印刷納本（大正二年十二月一日發行）
十二月號
金十錢

活動の朝のライオン齒磨

旅行にはライオン煉齒磨を！

家庭ではライオン粉齒磨を！

休息の夕のライオン齒磨

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想
第二卷第三號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年十一月三十日印刷納本（大正二年十二月一日發行）
十二月號
金十錢

活動の朝のライオン歯磨
旅行にはライオン煉歯磨を！

家庭ではライオン粉歯磨を！
休息の夕のライオン歯磨

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN